

# 平和記念だより

▼平成24年度

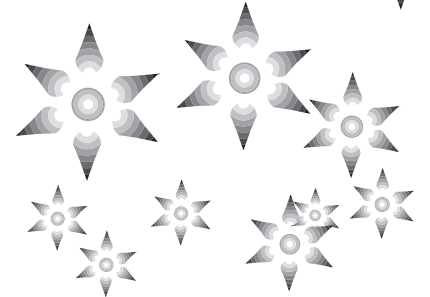
## 平和を語るつどい・ 憲法記念平和映画祭

◆編集・発行/高松市役所 人権啓発課 平和記念係  
 ◆連絡 先/高松市番町一丁目8番15号  
 TEL:087-839-2293 FAX:087-839-2291

5月26日(土)、高松市役所13階大会議室にて、「平和を語るつどい・憲法記念平和映画祭」を開催しました。

第1部「平和を語るつどい」では、約1時間、昭和20年7月4日当時中学1年生だった長谷 滋<sup>しゅう</sup>敏さんに空襲体験談をお話いただきました。

第2部「憲法記念平和映画祭」では、300人以上の子どもが犠牲になったパレスチナ・ガザ地区で、子どもたちが何を体験し、どんな暮らしをしているのか、子どもたちの言葉と絵で描いたドキュメンタリー映画「ぼくたちは見たーガザ・サムニ家の子どもたち」を上映しました。



平成24年度 **入場無料**  
事前申し込みが必要です

### 平和を語るつどい 憲法記念 平和映画祭

過去の高松空襲体験等、戦争体験を後世に語り継ぎ、戦争の悲惨さと平和の大切さを実感し、一方、世界に目を向けると、今なお続く戦争・紛争の現実と実態を知る事で、今、これから私達に何が出来るかを考える機会としたいと思います。

上映映画 監督・撮影：古畑みずえ 2011年/86分/シリア/プレシ-インターナショナル

## ぼくたちは見た

ガザ・サムニ家の子どもたち

映画は、爆撃の下で何を経験したのか、どんな暮らしをしているのかを、子どもたちの言葉と絵で描いています。それは同じ地球上で起きていることであり、遠い昔の話ではなく、今、このときも苦しんでいる子どもたちの話です。この子どもたちの心の叫びを、できるだけ多くの方々に届け、覚えていただきたいと思えます。  
監督 古畑みずえ

**とき** 平成24年 **5月26日(土)**  
 午後1時～4時(開場12:30)

**とこ** 高松市役所  
**13階大会議室**

主催/高松市  
 運営/高松市平和を願う市民団体協議会

お問い合わせ  
 申し込み先 高松市民政策局 人権啓発課  
 Tel. (087) 839-2293  
 Fax. (087) 839-2291



被災当時、町内会長だったお父様が避難誘導されている傍らで、自らが体験した高松空襲…深紅の霧のように次々と燃え移る炎の中「北の海辺へ行け」と指示されていたのに、火の傘のように開く焼夷弾を見て、直撃を避けるために「円周の外へ」と南に向かって、とにかく暗い方へと水田の中を這い回るようにして逃げ、茄子畑で機銃掃射に遭い、墓地で夜明けを迎えたお話しその他、当時の警防団や防空団、明治生まれのお爺様のお話など、臨場感あふれる語り口調に参加者は全員聞き入っていました。



# ■平和を語るつどい・映画祭の感想■



体験談は、迫力と真実の力が伝わってきました。同じ日本人の中での葛藤など初めて知ることもあり、戦争の悲惨さが伝わってきました。

映画は、戦争の悲惨さ、憎しみの連鎖の深さと怖さを痛感しました。

(40~50歳代・女性)

自分の無力さを痛感しました。1日1日を大切に生きようと思います。

(40~50歳代・女性)

記録映画として、ガザ地区の悲惨な様子は分かった。子どもたちの心の傷も。なぜイスラエル進行が起こったのか、映画の中の少女と同様、私も知りたいと思う。現実を知ってほしいと言った少女の思いを深く受け止めたいと思った。

(60歳以上・女性)

映画の残酷な場面、私には実体験がありませんが身にしみます。

1年後耕された畑を見て人間のエネルギーと辛抱強さを目の当たりにして、希望がもてる思いです。

(60歳以上・女性)



戦争の話や爪あと等、直接お話しを聞かせていただいたり、映画を見せていただきましたが、やはり戦争はよくないと思いました。

平和な時代、平和な国に生まれたことに感謝しなければならぬと思いました。世界から戦争がなくなることを祈っています。

(60歳以上・男性)



イスラエル、パレスチナとよく耳にする国ですが、それぞれの国が持つ深い問題を投げかけてくれていたように思います。

(60歳以上・女性)



## □イベントレポート

### ・高松空襲写真展

【日 時】6月29日(月)~7月6日(金)

【場 所】まなびCAN 1階エントランスホール

今回は「市民が写した高松空襲被災写真」や「焦土と化した市街地」などの写真パネルのほか、高松空襲の絵画や体験談など、計30点あまりを展示しました。まなびCANでの開催ということで、高松市街のコーナーでは片原町を中心に三越・香川県庁舎焼跡・鶴屋町国民学校の運動会・四番丁国民学校奉安殿・倉敷飛行機高松製作所等の写真パネルを展示、訪れた人は真剣に見入っていました。



アンケートご協力  
ありがとうございました。

7月4日は、旧高松空港近くの(現)林町の道路下水路から市内方面を見ていました。

B29のドロンドロンといった音、焼夷弾の花火のような(シュルシュルと音がしたらしい)きれいさ!!こわさ!!今も目に浮かびます。(60歳以上・男性)

私は当時12歳、空襲の中を家族と共に御坊町から沖松島の塩田に逃げました。

1日経っても電柱はくすぶりつづけ、黒くなった死体がゴロゴロとあり、男女の別も判らないような死体もあったのを憶えています。戦争は絶対にしてはいけません。(60歳以上・男性)

県外から越してきた者なので、四国での空襲の様子は全く知識がなかったので、この展示で知ることができて良かった。

高松に限ったことではないが、空襲(戦争)がなければ、もっと歴史的にすばらしい建物が残っていたんだろうなと思うと残念でならない。(20~30歳代・女性)



# 夏の行事予定

## 8月・高松市戦争遺品展

【日 時】7月30日(月)～8月3日(金) 【場 所】高松市役所1階 市民ホール

高松空襲の説明や被害の状況、被災写真・空襲絵画のほかに、聞き取りをした体験談等を集めた綴りも展示します。

栗林公園北庭での勤労奉仕の様子や、防火訓練のバケツリレー、運動会の様子等、学校生活のパネルを展示するほか、幅広い年齢・職種の方々の体験談・体験記も併せて紹介しますので、当時の様子をよりリアルに感じられるのではないかと思います。

また、当時の衣類や、物資不足の折の代用品等、人々の暮らしを伝える物品、被災資料や写真週報等の展示も行い、戦時中の人々の暮らしを彷彿とさせる内容となっております。



▲ 栗林公園北庭での勤労奉仕

## 高松市平和を願う市民団体協議会主催事業 高松戦災・原爆写真展

【日 時】8月6日(月)～8月10日(金) 【場 所】高松市役所1階 市民ホール

【内 容】原爆の惨状を伝える写真・絵画・遺品等

## 平和市長会議原爆ポスター展

【日 時】8月6日(月)～8月10日(金) 【場 所】高松市役所1階 市民ホール

【内 容】ヒロシマ・ナガサキ被爆の実相等に関するポスターの展示



高松市が、平成21年12月に加盟いたしました平和市長会議において、加盟都市が5,000都市を突破したことを記念して、全加盟都市で実施可能なポスター展が企画され、開催の呼びかけが行われました。高松市といたしましては、趣旨に賛同し、上記のとおりポスター展を開催することといたしました。

このポスター展を通して、核兵器がもたらした被害の実相を直視し、核兵器が人類の存在そのものを脅かす「絶対悪」だということを理解していただければと思います。

◀ 浦上天主堂(長崎)



## ☆同時開催☆ユニセフ・パネル展

7月30日～8月3日

『忘れられた子どもたち ～アグネス・チャン日本ユニセフ協会大使のスーダン・ダルフル視察記録～』

国連が世界最悪レベルの人道危機として警告を発しているスーダン・ダルフル地方を、2005年4月アグネス・チャン日本ユニセフ協会大使が視察しました。ほとんど報道されることもなく、国際社会から取り残され、深刻な状況におかれているアフリカのスーダン西部ダルフル地方の状況を、フォトジャーナリストの新藤建一氏の写真を通じて伝えます。

8月6日～8月10日

『立ち上がる女性たち ～アグネス・チャン日本ユニセフ協会大使が見た“忘れられた国”ソマリア～』

20年以上続く紛争や干ばつ、無政府状態…。150万人以上の国内避難民を抱え、360万人以上が人道的な緊急事態の中にいるとされながらも、国際社会から“忘れられた国”ソマリア。その現状と、その再起に向け立ち上がった女性たち、そして、そこに生きる子どもたちの姿をお伝えします。



## 戦時用語解説 ④〇

# 玉砕

1943(昭和18)年5月30日、ラジオの臨時ニュースから信じられない敗戦の悲報と耳慣れない新語を聞かされた。「大本営発表。アッツ島守備部隊は5月12日以来極めて困難なる状況下に寡兵よく優勢なる敵に対し血戦を継続中のところ、5月29日夜、敵主力部隊に対し最後の鉄槌を下し皇軍の神髓を發揮せんと決し、全力を挙げて壮烈なる攻撃を敢行せり。その後通信は全く途絶、全員玉砕せるものと認む。傷病者にして攻撃に参加せざる者は、これに先立ちことごとく自決せり」(2週間にわたる死闘を続けたが、結局全滅した。)

翌朝の新聞は、はじめて登場した「玉砕」という新語を声高に説明した。これこそ日本武士道の精華であると賞揚した。

冷厳な事実が玉砕とは全滅のことであり、攻撃側から見れば包圍殲滅したことを意味する。

全滅の言葉を使うと、熱し易く冷め易い国民の士気を衰えさせ、また最後まで健闘した部隊の名誉を損なうために、大本営報道部が引っ張り出した古語が玉砕であった。この言葉のすり替えで惨憺たる敗戦が隠され『海行かば』の荘重なメロディに彩られて中世武士道的な美意識が高揚され、全滅したが勝ったという不思議な精神作用をもたらした。さらに、守備部隊全将兵戦死の報が伝わると、「アッツの仇は増産で」という標語が作られる。

この言葉の言い換えで本質を変える作業は、戦時中に陸海軍を問わず頻繁に行われ、退却を転進、沈められた船を喪失などと、次々と造語が使われた。

「転進」の新聞発表には、ほとんどの場合、現地での「任務」や「作戦」を「終了」したための行動という説明(「…その任務を終了せしに依り、〇月△旬陣地を撤し、他に転進せしめられたり」云々。)がつけられた



山崎部隊隊長並びに  
畏し破格の恩命  
部隊將兵に

写真週報 第288号より

玉砕(全滅)した部隊と部隊長に同方面陸軍最高司令官からそれぞれ感状が送られた。さらに、上間に達せられた旨(申し上げて、天皇の耳に入ること)8月27日陸運省から発表された。

## 収藏品紹介 39

### 【繃帯包】

(ほうたいつつみ、ほうたいほうともいう)

傷口にまいて保護する繃帯は、この頃では包帯。

軍隊では戦場に出るとタマに当たって負傷することを前提にしているため、兵隊一人ひとりに持たせる応急治療セットがこれで、英語で「FIRST AID KIT」。

中身はガーゼや油紙・繃帯を小さくひとまとめにして国防色(カーキ色←茶褐色)の三角巾で包んだもので、表に使い方が印刷されている。負傷した時はこれを取り出して、自分自身が重症の時には戦友の手で応急処置をし、後方の野戦繃帯所か軍医のいる野戦病院まで後退する。

軍服の上衣の左ポケットに入れることに定められており、繃帯は戦場では兵器・弾薬について大事なものだから、新兵の教育書にも「物入れ(ポケット)は弾薬や繃帯包を入れるところだから、煙草やキャラメルなどを入れてはいかん」と注意している。

戦時中、陸海軍の病院に皇后が行啓し、あるいは侍従を差し遣わして戦場の将校を見舞うことであり、その時、病床に繃帯包が贈られた。同じ繃帯包でも純白のさらしや綿の大きな繃帯の包みで、包み紙には菊の御紋章や「賜」の一字があり、明治以来かしこくも皇后陛下御手巻きの繃帯といった伝承をもった、ありがたい見舞品であった。純朴な兵士の中にはこの御下賜に感涙にむせび、もったいなくて手をつけられぬまま、息を引き取った忠義者もいた。

御下賜繃帯



1939(昭和14)年4月、中国華北での戦闘で負傷し、左手を切断。同9月に皇后下賜品として頂いたものである。渡された時、「御下賜繃帯頒與後二於ケル病院長注意」なる印刷物も添えられていた。「名誉アル御負傷二対シ諸士ノ骨肉郷党ガ心配スル以上二我が国母陛下ニ於セラレ諸士ノ身ヲ御愛撫遊バサルル大御心ノ籠」ったものである。1937(昭和12)年12月9日となっている。

## 探しています!

高松市では、引き続き戦争中の生活の様子を伝える資料等を収集しています。

皆様からのご提供をお待ちしています。

## 編集メモ

今回は、5月26日の「平和を語るつどい・憲法記念平和映画祭」と「高松空襲写真展」の様子をお伝えしました。

7月30日から開催される戦争遺品展では、写真週報のほか、軍服等に実際触れられるコーナーもあり、当時の生活をより身近に感じられると思います。平和について改めて考える機会としてお役立て下さい。

▼ホームページアドレス (平和啓発の推進事業がご覧いただけます)

<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/18976.html>

